北京冬季五輪でウインタースポーツ人口拡大に弾みをつける中国

冬季五輪は「遠い存在」
一般の中国人は無関心か？

２月４日に始まった北京冬季オリンピックは、コロナ対策のため、市民と大会が「切り離された」形で行われるのと、春節期間中の開催ということもあり、一般の中国人にとっては「遠い国の出来事」のようで、話題に上るのは大会にともなう交通規制くらいだった。

ある中国人の友人が言うには、「夏のオリンピックは注目度が高く、テレビで見ようという気になるが、冬のオリンピックは注目する人はさほどいない」という。確かに、２００８年の北京オリンピックの時は、普段スポーツに興味のない人でも、開会式を見る人は多かった。筆者はその時間帯、仕事から帰るためバスに乗っていたが、ガラガラだったのを覚えている。

また、その中国人の友人は「夏のオリンピックは卓球や体操などよく知っているスポーツが多いんですが、ウィンタースポーツは自分にとって遠いので、あまり見る気はしませんね」とも語った。

ウィンタースポーツの発展を
段階的に行う中国

ウィンタースポーツが中国でまだ広く親しまれていないことは、中国政府も認めているようで、２０１８年９月に、中国体育総局は「帯動三億人参与冰雪運動実施綱要（2018-2022 年）」（「３億人のウィンタースポーツへの参加促進実施要綱（2018-2022 年）」、以下、「要綱」と略）を発表し、４年の年月をかけてウィンタースポーツを国民的スポーツとする計画を打ち出した。

「要綱」は、２０１８年から２２年までのウィンタースポーツ振興についての段階的目標を示している。それは次のようなものである。

２０１８年から１９年までは、競技ブランドを構築する段階だ。この時期は、特徴があり、人々の参加度が高く、一定規模のウィンタースポーツブランドの関連プロジェクトを重点的に支援し、一連のイベントを重点的に行うことによって、ウインタースポーツの社会的注目度をより高める。

２０１９年から２０２０年までは、ウィンタースポーツの人々の間での普及を推し進める段階だ。この時期は、政策の調整、基準の策定、人材の育成などの面で新たな進展が見られるようにし、党委員会が指導し、政府が主導し、社会が協力し、大衆が参加する発展の枠組みを徐々に形成し、ウィンタースポーツがキャンパスや機関、コミュニティ、家庭で一応親しまれるようになり、ウィンタースポーツを楽しむ人が着実に増加するようにする。

２０２０から２０２１年までは、ウィンタースポーツの全地域的普及を図る「南展西拡東進」戦略を実施する段階だ。この時期は、地域間協力が著しい成果をあげ、ウィンタースポーツが全国の各省・区・市をほぼカバーし、ウィンタースポーツ人口の大幅な増加を目指す。

「要綱」の計画によると、今年はウィンタースポーツが全国的発展の年で、中国の人々にとって身近なスポーツになる。冬季オリンピックはウィンタースポーツの「大衆化」を後押しする一大イベントだ。

国家統計局が国家体育総局の委託を受けて行った統計調査によると、２０１５年に北京が冬季オリンピック誘致してから２０２１年１０月まで、ウィンタースポーツ人口は３億４６００万人に達し、「３億人がウィンタースポーツに参加する」という目標を果たした。

１月１２日付の『新京報』は、２０１５年以降、ウィンタースポーツをしたことがあると答えた回答者のうち、「自発的に始めた」人の割合が９２．６４％だった。目的を見ると、「娯楽・レジャー」が７０．３５％と答えた人が最も多く、次いで「体力づくりのため」が１５．７８％、「趣味のため」が１１．４９％だった。回答者の３分の２近くがウィンタースポーツをしたいと答えたという。

「いつもと違う体験をしたい」

ウィンタースポーツ発展のカギは中国人の消費意欲

ウィンタースポーツ人口増加の背景には、消費の高度化がある。現在の中国は地域によってばらつきがあるものの、人々の所得が増え、生活必需品には困らなくなり、「生活の質」を追求するようになった。４億人ともいわれる中国の中産階級は外国製品など「他では買えないモノ」だけでなく、「いつもとは違う体験」を消費するようになった。農村体験ツアーはその一例だ。ウィンタースポーツも、「いつもとは違う体験」の消費の一部といえる。

また、健康志向も見逃せない。生活水準の向上につれ、人々は健康を重視するようになり、余暇などに運動する人が増えてきた。筆者の中国人の友人はデスクワークの仕事で、一日中パソコンの前にいる。仕事帰りや休日はテニスを楽しんでいる。他の友人のＳＮＳの投稿を見ても、「今日３キロ歩いた」、「マラソン大会に参加した」という投稿が少なくない。筆者のまわりの中国人の友人の中に、ウィンタースポーツを楽しんだという投稿はまだあまり見られないが、ウィンタースポーツの知名度は徐々に上がっているため、今後は増える可能性は十分ある。

前述のように、今回の冬季オリンピックはウィンタースポーツの「大衆化」に弾みをつけるだろう。昨年７月～８月に開かれた東京オリンピック期間中、オリンピック期間

中、アスリートに声援を送る一方で、自分も運動する中国人が少なくなかった。「オリンピック期間中、たくさんの競技を見ました。特に卓球が良かったです。私は息子を未来のオリンピック選手にするために、習わせています」と話す友人もいた。

東京オリンピックに触発されてか、当時。スケートボード、ロッククライミング、サーフィン、野球関連商品の売上が大きく増えた。同じようなことが今回の北京冬季オリンピックでも起こると考えられる。

活躍した選手に触発されて、ウィンタースポーツをやってみようという人も出てきて、一種の「ブーム」を起こすかもしれないが、問題はそれを持続させることだ。

ウィンタースポーツ自体、プレーする季節が限られているため、ほかのスポーツのようにいつもできるわけではないので、持続は容易なことではない。中国政府が掲げる「大衆化」には、冬の休暇はスキーに行きたいと一般の人々が思えるよう、場所や関連用具などの価格面など環境づくりが必要だ。

冬季オリンピックをきっかけに、中国のウィンタースポーツがどうなるか、動向に注目したい。